

ダンと称賛の礼儀 ——ベッドフォード伯爵夫人宛ての書簡詩を読む——

友田奈津子

ルネサンスにおいて手紙の果たした役割は、ほとんど唯一のコミュニケーション手段であると同時に、娯楽の少ない時代に受取人を楽しみを与える親密な社交の場を提供することであった。¹ジョン・ダン (John Donne) もまた、ホラティウスを嚆矢とする伝統的文学ジャンルである『書簡詩』(*Verse Letters*) を「もっとも当世風」(*Letters* 88) のジャンルとして再発見し、友人たちや敬愛する女性たちとともに、彼らが体験していた関心事や思想などを詩行に織り交ぜ送り合うことを楽しんだのである。²

書簡詩がほかのいかなる文学ジャンルとも異なる点は、それが手紙という性質上特定の読者、つまり宛名を持っているということである。書簡詩は宛名を携えているかぎり、その文脈や意味において受取人側からの理解を含む。したがって書簡詩を読む際、宛名がいったい誰なのかということが重要になる。この宛名によって決定される書簡詩の背後にある、差出人と受取人の人間関係の上にテキストが形成されていることを無視できない。

ダンはベッドフォード伯爵夫人 (Lucy Russell, the Countess of Bedford) に宛てた書簡詩の中で、手紙のやり取りについて冒頭いきなり次のように説明する。³

I'Have written then, when you writ, seem'd to mee

Worst of spirituall vices, Simony,
 And not t'have written then, seemes little lesse
 Then worst civill vices thanklessnesse. (II 1-4)

ダンが「最大の精神的悪徳である聖職売買罪」と「もっとも礼儀の悪である恩知らず」という言葉で述べているのは何ということはない、自分の非礼についておおげさに謝罪しているだけなのだが、ダンはこの弁明で手紙についての姿勢を示す。手紙における非礼を聖俗の悪という比喩にまで誇張する弁明には厳粛と遊びのエッセンスが盛り込まれ、謝罪というシーンに相応しくない諧謔が読み取れる。この不真面目な謝罪は、けれども、興味深い視点を含んでいる。ダンの謝罪の理由として、彼が社会の規範的礼儀を犯したことが挙げられる。“civill”という言葉が意味するのは、文明化された社会の中での市民、社会人としての礼儀正しさである。このような礼儀正しさを欠いたとき「恩知らず」となるのはどのような社会なのだろう。またこのような礼儀をつくり、難解で気取った表現を用いダンが手紙を送った相手とはどのような人物なのであろう。

ベッドフォード伯爵夫人は新しく到来したジェームス朝において、王妃アンのロンドン入城の際には真っ先に駆けつけるなど、その魅力と巧みな政治感覚の良さで寵愛を得、華々しく渡り歩いた初期ステュアート朝の一流の宮廷人であった。⁴ また宮廷仮面劇では「無上のバラ」(“the crowning rose”)と称えられ、数カ国語をたしなみ、当時著名な文化人でもあった。そして宮廷での華々しさよりも今日では、ダンをはじめとし、サミュエル・ダニエル (Samuel Daniel)、ジョン・フロリオ (John Florio)、マイケル・ドレイトン (Michael Drayton)、ベン・ジョンソン (Ben Jonson) など錚々たる詩

人たちとの親交によりその名は記録されている (*DNB*)。彼女は宮廷人そして詩人のパトロンとして 17 世紀初頭の社交空間に、その名が示すように—*Lucy* (「光」の意味)—燦然ときらめいていたのである。

ルネサンス期イングランドの経済的階層組織は、献呈者がパトロンへの献呈により社会的地位を高めていく社会的基盤の上に成り立っていた。⁵この階層組織の中でベッドフォード伯爵夫人は宮廷の中心的なパトロンとして文学作品を奨励する。詩人たちは作品を献呈することにより、彼女の注意を惹き付け楽しませ見返りを得ようとした。詩を書くことは単に文学的行為というよりも、むしろパトロン制度から生み出された社会的行為なのだ。ダンの文筆活動の軌跡をたどってみると、ダン自身が文筆活動で身を立てようとしたことはなく、宮廷に強力なコネクションを持つベッドフォード伯爵夫人に、アン王妃付きの職やヴァージニア会社への就職の尽力を求めていると思われる。⁶ダンが宮廷人、社会人の教養の自己宣伝として文学を見なしていたことを、彼の文学観を見る上で忘れてはならない。

このようなパトロンに宛てた広告として書かれた書簡詩は、同時に献呈詩であり称賛詩であり、しばしば研究者たちが批評するように、単なるパトロン制度の産物以外の何物でもないと思なされることが多い。けれども、ダンの複雑な言説は称賛という枠組みを乗り越え再構築し、あるいはまた逸脱するといった、蛇行を繰り返す謎に満ちたものである。このような称賛詩の定石を踏み外し錯綜した構造は、一概にパトロン制度の産物としてだけでは形成されない。

本稿はまず書簡詩が貴族など献呈される者を目下のものが美辞麗句で褒め称えろといった、伝統的な称賛詩であるということを確認した上で、ダンがこの伝統的なスタイルに依拠しながらも、いかに言葉巧みに独自の称賛のレ

トリックを駆使するか省察する。ほとんど意味を成さないように思われる誇張された称賛の表現や論の中に、差出人と受取人とのパトロン＝クライアントの縦割りの関係に収まらない親密な交流が存在していたことを明らかにする。

誰かを称賛するとき、ただ誉めさえすればいいというわけではない。称賛者は称賛する相手に合わせ、最も有効な手段を練らなければその称賛は成功しない。ましてベッドフォード伯爵夫人のような多くの詩人のパトロンの場合は、さらに巧妙な称賛の操作が必要となる。ダンはこの状況に対し、どのような手段を取るのだろうか。詩人は、自分が依拠する称賛の姿勢を次のように語る。

Madame,

Reason is our Soules left hand, Faith her right,

By these wee reach divinity, that's you;

Their loves, who have the blessings of your light,

Grew from their reason, mine from fair faith grew. (I 1-4)

「理性は魂の左手であり、信仰はその右手である」と、いきなり「理性」と「信仰」の間の二者択一の問いかけから始める。まずダンは「光」= Lucy、というベッドフォード称賛の紋切り型の手法を用いて「彼らの愛はあなたの光の祝福を得る」というように、ベッドフォード伯爵夫人と「彼ら」詩人たちの、与える者と与えられる者という授受関係を端的に示す。このようにダンは、彼女の周りに集う詩人たちの存在を意識していることがわかる。この

環境において、詩人としての力量を示すためにどのような言葉でパトロンを誉めるか、ということが重要になる。何を誉め何を誉めないのか。いかなる文脈でいかなる賛辞が有効なのか。ダンはあえてこの書簡詩の冒頭で自分の戦略を明らかにし、彼らほかの称賛者とは手法を変えることをあらかじめ宣言する。ダンは彼らの“reason”から生じる称賛ではなく、“faith”に重点的に依拠したやり方を選択するのである。

その一方でダンは続けて、「信仰」をより良く「表現するため」(“to *expresse*” 7)にはやはり「理性」も必要だと意見を覆す。ダンは「信仰」を称賛の手段とするのだが、その表現方法をそのほかの詩人たちのような「理性」で行うと言う。ダンは称賛の表現方法を彼らと類似したものにするのである。したがってダンは詩人たちの研究をすることから始めると言う。ダンは慎ましく述べる。

Therefore I study you first in your Saints,
Those friends, whom your election glorifies... (9-10)

詩人はベッドフォード伯爵夫人を称賛するのに、まず「聖人たち」(“your Saints”)であり「友人たち」(“friends”)、つまり彼女が選び彼女の周りに集う詩人たちを「研究」する。彼女と彼女に選ばれた「友人たち」の仲間入りすることがダンの目的であり、そのためにはダンは彼らの礼儀作法を学ばなくてはならない。

次にしなければいけないことは彼女の好みを知ることである。

Then in your deeds, accesses, and restraints,

And what you reade, and what your selfe devise. (11-2)

ダンはこのようにベッドフォード伯爵夫人の「行い、触れるもの、拒むもの」のみならず、彼女の「読むもの」「書くもの」まで研究すると言う。彼女の趣味を熟知しそれに合わせて称賛詩を送ることが肝心なのだ。さらに書簡詩は宛名であるベッドフォード伯爵夫人だけではなく、彼女の周りに集う聴衆、彼女に作品を献呈するほかの詩人たちの間にもまた回覧されるという事実を確認しておきたい。事実ダンの手稿の多くが分散していることから分るように、ダンの書簡は限られたとはいえ、ある程度の数の読者層を持っていた。⁷ 称賛詩は、「書簡」という言葉によって与えられる献呈する者と献呈される者との間だけで交わされるプライベートなものという一面的な図式で語られるのではなく、パトロンの周りに集まるダンの知己でもある詩人たちにも読まれ影響を与え合うという共同体を作り上げていたのである。⁸ こうした仲間内の文化的気風がダンの称賛の手法を方向付けていたことは確かであろう。彼女を取り巻く詩人たちは彼女を誉める際、宮廷風のデコーラムに則り、同じようなお決まりの賛辞を使う。ベッドフォード伯爵夫人の側で耳を傾ける聴衆の共通する語彙を用いてダンが遊戯的に試みる、称賛の礼儀がいかなるものなのかを見ておこう。

ダンのベッドフォード伯爵夫人に宛てた書簡詩は、基本的に献呈される者に対する賛辞によって成立しているのだから、高貴なる女性に対し当然守るべき礼儀作法というものが存在するはずである。実際、詩人は、自らを「低き者」(“lownesse mee” II 8) や「蟻塚の一粒の砂」(“A corne of one low anthills dust” IV 28) と呼び、これ以上腰を屈めることなど出来ないくらい屈めた姿勢をとり礼儀正しく振る舞う。一方でベッドフォード伯爵夫人に対

しては「女性の姿をして我々の前に現れた最初の天使」(“The first good Angell, since the worlds frame stood, / That ever did in womans shape appeare” I 31-2)、「神の傑作」(“Gods masterpeece” I 33)、「神の代理」(“His Factor” I 34)といった最大限誇張された調子で褒めていく。ここには謙譲と賛美にそれぞれ誇張法のレトリックが重ね合わされているのだが、ダンの場合そのあまりの過剰さによって、称賛をほとんど意味を成さないナンセンスなものにしてしまう。ダンはベッドフォード伯爵夫人との間に、通常パトロン＝クライアントの関係の礼儀作法をどこまで守り、崩そうとしているかをたえず試みるのである。

この誇張されたレトリックがダンのベッドフォード称賛の基本的な戦略なのだが、ダン自身はときおり書簡詩の中で「称賛は不協和音である」(“praises discords bee” III 31)、「褒めすぎは不名誉になる」(“too much grace might disgrace” IV 25)と周到に誇張された称賛に対する注意を何度も喚起する。このような注意があえてされるということは、それだけダンの書簡詩があからさまな「詩的狂気かお世辞の味がする」(“Tast of Poëtique rage, or flattery” II 63)ということだ。けれども彼の言い訳は、前後の慇懃な言い回しと相俟って軽妙な雰囲気を生み滑稽味すら醸し出す。この慇懃無礼な語り口で、ダンは言葉どおり生半可なお世辞を拒否するのである。それではダンはいかなる方法を用いてベッドフォード伯爵夫人を「称賛」するのであろうか。

ダンは次のような言葉を賛辞として設定する。

In every thing there naturally growes
A *Balsamum* to keepe it fresh, and new,

If 'twere not injur'd by extrinsique blowes;
Your birth and beauty are this Balme in you.

But you of learning and religion,
And vertue,' and such ingredients, have made
A methridate, whose operation
Keeps off, or cures what can be done or said. (I 21-34)

ここで挙げられるのは「生まれ」(“birth”)と「美」(“beauty”)、そして「学識」(“leaning”)「信仰」(“religion”)「美德」(“vertue”)である。これら五つの美点は確かに賛辞の言葉としては不可分なく適切なものではあろうがその分、称賛のレトリックの常套であり何の目新しさも特徴もない言葉である。それでも当時の称賛詩の枠組みを基本にし、ダンも含め詩人たちは非常に類似した用語とイメージで彼女を表象していく。

基本的な女性の称賛の仕方としてはまずその血統と美が称えられることが通常である。「生まれ」と「美」が称賛の通俗的なやり方であるのはあえて述べるまでもないが、事実、宮廷人としてこれら二つの美点も必須のものであった。こうした常套的な美点を提示した上で、ダンは独自の展開を行う。まずこれらに医学的なメタファーを与えるのである。先に挙げた「生まれ」「美」は痛みを癒す「バルサム」(“Balm”)として、「学識」「信仰」「美德」は「解毒剤」(“methridate”)として喩えることは単なる比喩以上の意味がある。つまりダンはこうした美点を内面や外面の美しさを称えるためだけに掲げるのではなく、彼女が誹謗される対象になったとき、または、そうなる以前の、処方として考えているのである (“If'twere not injur'd by

extrinsique blowes” I 23, “Keeps off, or cures what can be done said” I 28)。

さらに特徴的なのは、ダンが「生まれ」と「美」を称賛したあとで、「学識」「信仰」「美徳」に関しては聯を変え、“but”という切り替えしにより後者を強調していることである。「生まれ」や「美」は宮廷人として女性として当時必須のものだが、ダンはこれらの美点をとりわけ褒めようとはしない。むしろ後半の「美徳」などがそれら生得の利点を凌ぐと考えていたのである(“To the Countess of Huntingdon” 60)。

「学識」はダンら詩人たちによって声をそろえて誉められるベッドフォード伯爵夫人の特質である。例えば、フロリオはモンテーニュの『エッセー』の翻訳を学識ある最適の読者として彼女に献呈し、ダニエルは彼女を「学識ある女性」(“learned lady”)と、ジョンソンは「男性のような魂を持つ学識ある女性」(“a leaned lady and a manly soule”)と呼ぶ。⁹ベッドフォード伯爵夫人を誉める際、この頻繁に使われる“learn”と言う言葉が示すように、何よりも学識が特権的な賛辞であり彼女を表象する際には外せない言葉なのである。ダンもまた彼女の文学的判断を重視し、「自分自身の価値判断の基準にしたい」(“I have made her opinion of me, the balance by which I weigh my self” *Letters* 151)と、彼女の側近でダンの無二の親友であるヘンリー・グッディヤ(Henry Goodyere)に書き送っている。ダンはただ称賛するだけでなくこの学問好きのパトロンに対して、新科学、宗教談義などを書簡詩の中に織り込む。野心的な彼女を称賛するにはありきたりな誉め言葉より、彼女の知的好奇心を満たすやり方が有効であったのは想像に難くない。またダンの術学的知識の氾濫、ウィットを示すことによって読者に詩人の知性を開示するのだ。

「学識」に続く「信仰」「美德」はダンの称賛詩の中でもっとも無視できないキーワードである。またダンにとって「信仰」と「美德」は切っても切り離せない一つの大きなテーゼである。「信仰」と「美德」はただ頻繁に使用される便利な称賛の手段としてでなく、意図的に二つの事柄を並列させ、同一のものとして意味を限定して使用される。ダンにとって「信仰のほかには美德は存在しない」(“There is no Vertue, but Religion” “To Rowland Woodward” 16) ののである。また「美德は原初の盲目の時代の信仰」(“vertue was to the first blinded age” “Satyre III” 7) である。こうした基本的な「信仰」の対象である「美德」におけるダンの概念は、ベッドフォード伯爵夫人への称賛の中で最大限生かされる。

それではダンが「信仰」とまで言い切る「美德」とは何なのであろうか。実際「美德」ほど称賛詩というジャンルにおいてありふれた言葉はなく、この言葉を用いることは称賛詩の系譜を考えると、むしろ伝統的な部類に属すると言える。詩人たちはこぞってパトロンの「美德」を描くことを旨とする。いかに美德を描くかということが称賛のテーマの一つであることは間違いないであろう。

「美德」という言葉は、語源的にラテン語の“virtus” — “manliness” という意味を持ち、道徳的な意味に勇気や胆力を兼ね備えた人間を指す言葉として認知された。さらに「美德」は、元来“faith” “hope” “charity” といった神学三徳目と同時に、“justice” “prudence” “temperance” “fortitude” といった古代哲学の四徳目とされている。こうした重層的な美質をひとまとめにした理想的な人間の特性とされる「美德」が、オーソドックスな称賛の記号として有効であったことは想像に難くない。しかしそれだけにこの言葉は非常に多義的な意味を包含する。けれどもダンはこの「美德」という広義な

言葉を単なる便利な形容辞として使用するのではなく、徹底してこだわりを見せ、「美德」という言葉を巧みに操作し、ダン特有の称賛を展開する。

ダンはこの「美德」を最も主要な称賛の軸にする。

For, as darke texts need notes: there some must bee

To usher vertue, and say, This is shee. (11-2)

詩人の役割は「美德」の案内人であると自任している。つまり、“This is shee”と世に知らしめる宣伝係なのである。ベッドフォード伯爵夫人はまさに、「美德」の化身として表象される。しかしここで問題になるのは、“darke texts need notes”というフレーズである。「美德」の化身である彼女が前もって「難解な書物」との比喻によって捉えられている。「難解な書物」=ベッドフォード伯爵夫人、「注釈」=詩人の称賛なのである。この「難解なテキスト」を読み解く鍵である「美德」の詩人の注釈に耳を傾けてみよう。

さきほど述べたとおり「美德」とは、当時の称賛の記号の中で最もありふれた言葉である。けれどもダンはこの「美德」を安易に称賛の言葉として留めない。つまりダンはベッドフォード伯爵夫人を「美德」によって称賛はするものの、すぐさま意地悪く傲慢な調子で完璧な「美德」の具現者であるはずの彼女に、「美德は、ある程度の、いや、適度の悪を持っている」(“Vertue hath some, but wise degrees of vice” III 76)と彼女の「美德」が完全ではないと言い、また「貴女を美德の神殿として私は見たい。美德そのものではないのです」(“I would behold / You as you’are vertues temple, not as shee” II43-4)というように謎めいた言い方をして、そのまま「美德」

として賛辞することを避ける。このような不遜な言い回しが称賛の手法として有効であったとは思えないが、ダンはあえて称賛の軸である「美德」という概念に揺さぶりをかけることによって注意を促す。

ベッドフォード伯爵夫人の様々な美質は“Balm”や“methericidate”として何らかの薬餌的な事象として捉えられていた。特にダンは「美德」を「強壯剤」もしくは「栄養剤」（“cordial” “nourishment” III 90）と呼び、「美德」が人体に及ぼす「薬効」という意味に注目する（*OED*）。このダン好みの医学的メタファーの付与はつまり、「美德」が本来病気を癒し予防するための薬であるということを喚起する。「美德」にとっての病気とは即ち悪徳にはかならず、ダンはこの「美德」を悪徳との相対において議論するのである。

それでは、ダンがベッドフォード伯爵夫人に「美德の楽園」（“Paradise” II 72）を見出したのに対し、悪徳はどこにあるのか。「損得、快楽、見え、贅沢」（“Profit, ease, fitness, plenty” III 23）の巢窟、宮廷である。「隅々まで探し求めると、今や素晴らしく輝いているのが世界の最高の部分、そのすべてである貴女」（“hath sought / Vertues in corners, which now bravely doe / Shine in the worlds best part, or all It; You” III 18-20）のところであったとされる「美德」は、そもそも「宮廷人の心の中では、貝殻追放によって消滅した」（“vertues in Courtiers hearts / Suffers an Ostracisme, and departs” III 21-2）ものなのである。「宮廷」に本来あるべきはずの「美德」がなくなったことを執拗に訴える。さらにダンは「美德」の役割を「女性を贖い」「宮廷を保全する」（“It ransome one sex, and one Court preserves” III 25）ための規範にする。ダンはベッドフォード称賛のために、巧妙に宮廷という比較対照を打ち立てる。

ダンの宮廷批判は、『風刺詩』（*Satyres*）の中で辛辣に展開される。宮廷

風刺といったトピックが、当時一流の宮廷人であったベッドフォード伯爵夫人にとってどのように受け止められたのであろうか。ダンの『風刺詩』はジョンソンによって彼女に献呈され、彼女も目を通したと推測される。『風刺詩』は、目利きの批評家であったジョンソンにとっても、彼のパトロンに送るに十分な価値ある作品でありダンの名を高めるものであった。ダンは夫人の「読みもの」を研究すると同時に、彼自身の作品が読まれるという相互関係を築いている。そしてダンの『風刺詩』の読者であった彼らにとって、ダンの宮廷風刺は既に認知済みのものであり、このような読書経験を通して作者であるダンと読者であるベッドフォード伯爵夫人は、話題や姿勢を共有していた。

けれども、このようにテキストの中で繰り返される反社会的な態度は、リベルタンの姿勢によるとしても、宮廷を基盤として成り立つ社会構造に離反しようとするのではなく、逆説的にダンの強い宮廷への関心から生じているのであろう。したがって宮廷がアンチテーゼとしてベッドフォード伯爵夫人に示されるのではなく、ダンの痛烈な風刺の語り口の読者であったベッドフォード伯爵夫人に得意の宮廷風刺を盛り込みながら、風刺を彼女への称賛へと転化させるのである。このように、「美德」という本来その人物に内在する美質が、社会的コンテキストによって読み込まれるためには、読者が書簡詩の文面から読み取れる以上の事前の了解が、詩人と受取手の間に存在していることが前提条件となる。

けれども文面上、やはり宮廷はあくまでも悪徳の住処として描かれる。

Therefore at Court, which is not vertues clime,
 (Where a transcendent height, (as, lownesse mee)

Makes her not be, or not show) all my rime

Your vertues challenge, which there rarest bee; (7-10)

宮廷とはすなわち「美德の領域ではない」のであり、ダンは宮廷に「悪徳」の住処というレッテルを貼り、その比較対照との差の大きさによりベッドフォード伯爵夫人の「美德」を称えるのである。当然彼女はその徳の「並はずれた高さ」ゆえに、宮廷には「いない」か「見えない」のである（そして詩人もまた「低さ」により宮廷にはいない）。この詩人と受取手の宮廷からの不在が新たな展開を見せる。

この作品を読む際に興味深いことは、おそらくこの書簡が書かれた際、比喩的な意味だけではなく実際ベッドフォード伯爵夫人は宮廷にいなかった。最終部分で明らかにされているように、彼女は1607年から1617年の間、地所であり退廷したときの滞在先であったトイックナム・パーク（“Twicknam” 70）にいたと思われる。ダンはこの時節をとらえ、作品の中でトイックナム・パークをまるで地上の楽園かのように描き出す。ダンは「美德」の領域として空間的に彼女の滞在先を想定する。ダンはこの書簡で、芸術家たちの集う共和国（“Commonwealth” III 87）へ招待してもらうことを願う。

ダンは作品の中であえて宮廷という悪徳の住処からベッドフォード伯爵夫人を引き離す。けれどもいくら悪徳の住処とはいえ現実に宮廷に身を置く彼女にしてみたら、田舎に追いやられたのでは称賛にはならない。したがってダンは、文化的・社会的中心地を彼女の世界に移転し焼き直すのである。それではダンの誇張を許容する称賛の軽業がいかにか思い切って世界を転写するか見てみよう。

Out from your chariot, morning breaks at night,
And falsifies both computations so;
Since a new world doth rise here from your light,
We your new creatures, by new reckonings goe.

This shoves that you from nature lothly stray,
That suffer not an artificiall day. (II 19-24)

「宮廷」を悪徳の領域として現実世界の中心を弾劾したダンが詩行に生み出すのは、ベッドフォード伯爵夫人を世界の中心に据えたまったく新しい世界である。彼女が地所に夜中であろうか、到着したシーンを思い描きながら、その映像にダンは輝く Lucy (光) が馬車から降りる姿に暗闇に朝をもたらすというスペクタクルなイメージを重ね合わせる。さらにはその「光」から「新世界」が登場し、「私たち」詩人は彼女によって生み出された「新しい被造物」となるのである。さらには彼女の光により、世界にはもはや夜は来ない。この冒瀆的なまでに壮大なイメージの増幅により、ベッドフォード伯爵夫人は神格化され創造主のごとく称えられる。

一人の女性をここまで称えるとはかなり大胆である。一人の少女の死に関して描かれた『周年の歌』(*The Anniversaries*) について、ジョンソンの「冒瀆的で罰当たりな」という批判に対し、ダンの「ある理想の女性を描いたのだ」などといった言い訳は、受け手が明らかな以上ここではまったく通用しない。¹⁰むしろダンは意図的にこの冒瀆的なまでの誇張表現を称賛に用いている。ぎりぎりまで挑戦的な表現を用いてベッドフォード伯爵夫人の反応をくすぐるのである。

こういった大胆な称賛の方法は、ダンが「私は貴女をのぞいて美徳や美が

成長するのを知ることなどなかったのだから、ほかの女の中で（すでにしてしまったけれど）それらが輝いていたなどと言うべきではなかった」(“for since I have never known / Vertue or beautie, but as they are growne / In you, I should not say they shine, / (So as I have) in any other Mine” V 13-6) とわざとらしく弁解しているように、ベッドフォード書簡の中で展開される神格化が『周年の歌』に使い回されたものなのである。けれども、見たこともない早世した少女を謳ったのとは違い、入り組んだ人間関係を実際作り上げていたベッドフォード伯爵夫人に対する神格化はこのような弁解を必要としない。称賛を称賛のレトリックとして受け止めることの出来る認識が存在しているのだ。

In this you'have made the Court the Antipodes,
 And will'd your Delegate, the vulgar Sunne,
 To doe profane autumnall offices,
 Whilst here to you, wee sacrifices runne;
 And whether Priests, or Organs, you wee'obey,
 We found your influence, and your Dictates say. (II 25-30)

「宮廷を対蹠地にする」(“the Antipodes”) とあるように、ここでさきほど謳われたベッドフォード伯爵夫人の世界がそれ自体のみで存在しているのではなく、宮廷に対蹠する地として見なす。あくまでも彼女の世界は宮廷との相対によって成立する。ダンは、宮廷のパトロン制度を、「捧げ物を持って駆け寄ってくる」というように滑稽な調子で描く。つまり、何行にもわたって描いていた理想的な新世界が、このようなパトロン＝クライアントの関係の

上に成り立つ世界であることを端的に明らかにする。

ダンはこの構造にさらなる仕掛けをする。ベッドフォード伯爵夫人の新世界は構造的には宮廷の「対蹠地」ではあるが、ここで詩人たちは「捧げ物を持って駆け寄ってくる」宮廷人としてではなく、“Priest”や“Organs”として表象される。この新世界は、「宮廷」という悪徳を完全否定し、ベッドフォード伯爵夫人を神のごとく「信仰」する宗教組織を上書きする。ダンにはベッドフォード伯爵夫人と詩人たちの交際を擬似宗教的世界に差し替え、ベッドフォード伯爵夫人を「信仰」する完結した世界を作り上げるのだ。

しかしながらダンは続く聯で再び、宗教的メタファーを退ける。自分の描いている作品は「嘆願書」(“Petitions” II 33)であり、「讃美歌」(“Hymnes” II 33)ではないというのだ。¹¹「嘆願書」とは明らかに宮廷の社会構造の中に属すものである。ダンが『風刺詩』の中で述べているように宮廷とは「嘆願書」を携える者たちの惨めな地獄なのである (“Satyre IV” 156-160)。それでもなお、再び「讃美歌」を否定し「嘆願書」を選択することにダンの称賛の戦略が見える。またベッドフォード伯爵夫人を中心とした世界が、宮廷という世俗の世界をまるで宗教界のように比喩し両義的に描かれていることは大変興味深い。このようにダンは「美德」という称賛の記号を利用することにより、「信仰」の話題へ簡単に橋渡しする。ダンにとって「美德」が「信仰」と同一視され構造がいくら宗教的であっても、そこに持ち込まれるのは「讃美歌」ではなく「嘆願書」という社会的コードなのだ。ダンは「嘆願書」にすり替えることによって、社会から自立する世界を横断し、その公共性を引き上げる。¹²このテーゼを執拗に絡み合わせ、話題をあえてこのような道徳的な文脈に一般的に敷衍することにより、自らの惨めな状況を喚起すると同時に宮廷で繰り広げられる社会的行事を模倣し、この擬似宗教的世

界において共通認識を持つ人々のコミュニケーションを濃密化するのである。宮廷の外側に両者をダンがあえて位置付けることによって、ベッドフォード伯爵夫人を中心とする共同体を、新たな帰属する仮想空間として設定し、文化的・社会的アイデンティティを見出すのである。

さらに、こうした「信仰」と「美德」の執拗な並列と交雑は文面上現れてこない言説を内示しているように思える。詩行を覆う「美德」という権威的な言葉により、うち消され隠されていく文脈が存在するのではないだろうか。

もう一度ダンが自分の称賛の方法を「理性」ではなく「信仰」に拠るとしたベッドフォード称賛の手法に戻ろう。ダンは彼女の選んだ友人や読むものなどを研究して、何とか「彼女の愛される理由」(“the reasons why you’re lov’d by all” I 13)を探ろうとする。けれどもみんなが選ぶ「理性」の力では、「その理由が余りにも多くなりすぎたため」(“the reasons why you’re lov’d by all, / Grow infinite” 13-4)、結局合理的な理性の届く範囲を超えてしまう。そこで再び詩人が立ち返るのは傾倒する“implicit faith”である。

Then backe againe to’ implicit faith I fall... (11)

“implicit faith”つまり「暗黙の・絶対的な信仰」とは何なのか。ダンは次の不可解な言葉の中に収斂させていく。

And rest on what the Catholique voice doth teach. (12)

“Catholique”とは「カトリック」ではなく「普遍的な」という意味に読む

のが正しいのであろう。なぜならこの書簡が書かれたであろう社会的状況を考えたとき、17世紀のこの時代におおびらにカトリックを表明することは社会的に危険性を帯びておりきわめて危ういからである。けれどもあえてダンはこのきわどい言葉を唐突に顕在化し、彼が依拠するとした「信仰」の一つの着地点とするのである。¹³

実際、ベッドフォード伯爵夫人はピューリタンとして育てられ、1612年以降決定的に彼女は敬虔になっていく。¹⁴けれども彼女の伺候していたアン王妃自身はカトリックで、初期ステュアート朝に緊張感を持ち込んでいたのは確かであり、彼女の宮殿はカトリックとプロテスタントのパワーバランスで成り立っていた。そのような宮廷に身を置くベッドフォード伯爵夫人にとっても、カトリックの話題は興味を惹かずにいられなかったのではないであろうか。

ダンは“religion”を今日私たちが考えるような制度化された宗教、ローマ・カトリック、プロテスタント、国教会には限定していない。けれどもダンはほんの一瞬にしる「カトリックの声」(“Catholique voice”)を詩行に響かせることにより、危険なゲームをベッドフォード伯爵夫人に仕掛ける。そしてその声の導くベッドフォード伯爵夫人の「善良さ」などといった平坦な称賛を、意義あるものとして浮かび上がらせ再確認するのである。

ダンとベッドフォード伯爵夫人との親密な関係の中で、「信仰」について互いに共有できる暗黙の親和性が存在していた。このテキストにどこまで客観的事実を見出すのか、それとも単なる言葉の綾なのかを明らかにすることは、書簡詩がダンとベッドフォード伯爵夫人の間にあらかじめ認識されていた人間関係の上で成り立っている限りきわめて難しい。けれどもダンはこの宗教的言説を操作し、宮廷社会と宗教的な社会を混交させることによりベッ

ドフォード称賛の場を社会空間として前景化するのである。

ダンとベッドフォード伯爵夫人の関係は、経済的・社会的格差から来るパトロン＝クライアント関係にあり、ダンがこの従属的關係に対し不安を感じていたと見なすことは、ダンの慣行に収まらない称賛を見れば確かに妥当かもしれない。けれどもダンの称賛のレトリックはこのような社会的区分による特権的な選別によってのみ生じるものではない。むしろそれ以上に、ダンがベッドフォード伯爵夫人に彼女に対する礼儀と相俟って、親和の情を感じる関係の中にいっそう的確に彼らの関係を理解することができるのではないだろうか。つまりダンの書簡詩は、彼が強調した「学識」、そして「美德」と「信仰」というベッドフォード称賛の中に埋め込んだ共通の知的好奇心、共同体意識、文化的規範が結ぶ社会空間の中で生み出されるのだ。

最後に、“religion”という言葉について、ベッドフォード伯爵夫人への散文書簡の中で述べた手紙の役割について、ダンが触れている個所を通して見ておきたい。

In Letters, by which we deliver over our affections, and assurances of friendship and, and the best faculties of our soules, times and daies cannot have interest, nor be considerable, because that which passes by them, is eternall, and out of the measure of time. (*Letters* 23)

ダンが手紙によって「愛情、友情の保証、そして最も重要な部位である魂を配達するのである」と述べる。そしてこの手紙の中に込められることにより愛情や友情などは時間を超越し永遠のものとなるというのである。ダンは称賛という枠組みを借りつつも、この親密な友情の証左を綴る手紙を贈る。

ダンがベッドフォード伯爵夫人に書き送ったように、称賛の言説を通してなお確認されるという「友情の保証」について、「友情」がダンにとってどれほど重要なことであったかについては今後見ていきたい。けれども同時代人フランシス・バイコンが『隨筆集』の中で“religion”を「最も基本的な人間社会の結びつきである」(“Religion being the chief band of human society”)¹⁵と定義するように「友情」が「信仰」として称揚される時代になりつつあることを、ダンのベッドフォード書簡は示している。称賛という階級的言説を友情礼賛に応用するのだ。ダンが散文書簡の中で「友情は第二の信仰」(“second religion, friendship” *Letters* 85) と言うように、人と人との結びつきを「信仰」と見なし、この信仰を「行動と言葉によって書かれたものが手紙」(*Letters* 114) とするのである。この社会の結びつきを確認しあい、接続するための手段として詩人は手紙を社会空間に発送する。そして私たちの「手紙」もまたこの絶え間ない交信の時代、繋がり求めて電子空間を浮遊する。

注

- 1 基本的な手紙の社会的な役割については Elbert N. S. Thompson, *Literary Bypaths of the Renaissance* (New Heaven: Yale University Press, 1924) を、またダン周辺の手紙詩についての状況については Margaret Maurer “John Donne’s Verse Letters,” *Modern Language Quarterly* 37 (1976); 234-259 を参考にした。
- 2 本稿のダンの引用は、散文書簡については M. Thomas Hester, ed., *Letters to Severall Persons of Honour (1651)* (Delmar, N. Y.: Scholars’ Facsimiles & Reprints, 1977) に (以下 *Letters*)、書簡詩に関しては Herbert J. C. Grierson, ed., *The Poems of John Donne. 2 Vols.* (Oxford: Clarendon Press, 1912) に拠

るものとする。

- 3 ダンのベッドフォード伯爵夫人に宛てた書簡詩のタイトルは宛名に拠って“To the Countesse of Bedford”とされており煩雑なので、便宜上本稿で引用する作品をそれぞれテキストの配置順に“Reason is our Soules left hand”をⅠ、“You have refin’d mee”をⅡ、“I Have written then”をⅢ、“This twilight of two yeares”をⅣ、“Though I be dead, and buried”をⅤと表記することにする。
- 4 ダンとベッドフォード伯爵夫人の関係については R. C. Bald, *John Donne: A Life* (Oxford: Clarendon Press, 1970) のほかに、ベッドフォードと他の詩人との関係についても論じられている Barbara Kiefer Lewalski, *Writing Women in Jacobean England* (Cambridge: Harvard University Press, 1993) を参考にした。
- 5 パトロン制度のダンに与えた影響については Arthur F. Marotti, “John Donne and the Rewards of patronage,” in *Patronage in the Renaissance*, eds. Guy F. Lytle and Stephen Orgel (Princeton: Princeton University Press, 1981) 207-234 の中で詳しく論じられている。
- 6 実際はベッドフォード伯爵夫人のクライアント、ジョン・フロリオ、サミュエル・ダニエルはアン王妃の私室付き宮内官の役を得たがダンが彼女から就職の斡旋を受けることはなく経済援助もまた彼女の財政的逼迫から望んだほど受けることはできなかった。
- 7 Peter Beal, *Index of English Literary Manuscripts, I: 1450-1625, Part 2* (London: Mansell Publishing, 1980) 243-61 を参照のこと。
- 8 手稿の回覧とその文化については、Arthur F. Marotti, *John Donne: Coterie Poet* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1986)、*Manuscript, Print, and the English Renaissance Lyric* (New York: Cornell University Press, 1995) を参照のこと。また書簡の織り成すネットワークに関しては、Harold Love, *The Culture and Commerce on the Texts: Scribal Publication in Seventeenth-Century England* (New York: Oxford University Press, 1993) においても当時の手稿文化に基づいてさらに詳しく論じられている。

- 9 ダニエルについては “To the Lady Lucie, Countess of Bedford” 33 in Alexander B. Grossart ed. *The Complete Works in Verse and Prose of Samuel Daniel*. 5 Vols. (New York: Russell and Russell, 1963)、ジョンソンについては “On Lucy, Countess of Bedford”, beginning with “This morning, timely rapt with holy fire” 14 in C. H. Herford, Percy and Evelyn Simpson eds. *Ben Jonson*, 11 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1925-52) から引用した。
- 10 “Conversation with Drummond” Vol. I, 133.
- 11 ダンはまた散文書簡の中でも「詩の嘆願書」(“a petition for verse” *Letters* 67) と、この作品に言及しているように、「嘆願書」であることを強調する。
- 12 David Zaret, *Origins of Democratic Culture: Printing, Petitions, and the Public Sphere in Early Modern England* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 2000) は、「請願書」という社会政治的な媒体に世論の誕生、そして一種の紙上公共圏を見出す。
- 13 本稿はダンの宗教的立場について議論する場ではないが、ダンがベッドフォード伯爵夫人と親交を持っていた 1608 年頃創作した宗教詩 *The Litanie* についてグッディアに送った書簡は興味深い示唆を与える。ダンはこの作品を「友人たち」の間のみの回覧に限定し出版を禁じているのだが、その理由としてこの作品がカトリック的に見られてしまう可能性を秘めていることを怖れるのである。この辺りの議論については P. M. Oliver, *Donne’s Religious Writing* (New York: Longman, 1997) 81-85 が当時の状況を踏まえながら説明している。
- 14 この頃カルバン派の祭司で医師であるバージェスとの出会いがベッドフォード伯爵夫人のピューリタンへの傾倒を推し進めた。Bald, 172-9, Patricia Thomson, “John Donne and the Countess of Bedford,” *Modern Language Review*, 44 (1949) 329-340 を参照のこと。両者ともベッドフォードとダンの友好が遠ざかったのをバージェスという強力な宗教指南者の登場によるという説明を加えている。
- 15 “Of Unity in Religion” in Brian Vickers ed., *Francis Bacon: The Major Works*. (Oxford: Oxford University Press, 1996) 344.